

いよいよパームサンデーの朝を迎えました。季節もいよいよ春の気配を感じます。イースターには、中嶋香都恵姉、保科望兄の洗礼式と、森岡李那姉の堅信礼を予定しています。先週には立石稔兄が病床洗礼を受けられました。神の子とされて、新しい命を受ける兄弟姉妹に、主の限りない平安と恵みを心よりお祈りいたします。

愛する者が殺される

戦後 80 年の日本は、身近な人が殺されるということなど私を含めて、ほとんどの人が経験していません。どこか、そんな酷いことは起こらない、と思っています。しかし、本当にそうでしょうか。敬愛する先生の突然の訃報、バイブルキャンプの友人の事故死、母教会の先輩の自殺、思い返すと、今でも古傷がうずくような死別が、人生の中に刻まれていることに気付かされます。イエス様の十字架での死も、クリスチャンにとって、「愛する方の処刑」という、この上なく残酷な現実です。受難週を迎えて、私たちは十字架を仰ぎながら、そこに神のさばきとその愛を見出しましょう。

東北の町に「ここより下に家を建てな」という先人の石碑があるそうです。そして新しく「津波到達点」という新しい柱も立てて、大切な人を失った悲しみを、後世の人を救うために活かしているそうです。厳しい場面は、私たちの人生に何かを突きつけます。後から思い巡らして、その出来事が、自分にとってどんな生き方をしようか教えているのかを、悟ることは本当に大切なことなのです。

神の裁き

どういうわけか、この世界には人間にとって不都合なことが無くなりません。それは神の領域であって、人間の小ささでは理解できません。しかし、その不満を神様や誰かのせいにして、孤独な人生を歩むことは、神様の願う祝福された姿ではないのです。イエス様は、裏切られ、軽蔑され、虐められ、殺されました。しかし、それでも神の真実が変わらず、神の子でさえ、そのような運命を辿ったということが、私たちには、かけがえのない、救いの標となりました。神の裁きという言葉は、とても強烈ですが、実は、神の裁きは、神の愛と表裏一体です。田舎の「神は世界を裁かれる」というポスターは、先述の「津波到達点」の柱と同じです。つまり、それを見る人が救われるための警告です。

本当に大切なことは、自分自身の大きさでは計り知れない、神様の愛があるということ、謙虚に受け取ることです。つまり、目に見えるものを超えて、命さえ差し出すほどの大切なものがあるという、限りなく大きな世界へ私たちが心を開く時、厳しい裁きの裏にある、大きな愛に包まれます。

イエス様は、神の子でした。神殿の幕が裂け、死者を甦らせ、天地を揺るがす力を持っておられました。この方の十字架は、私たちの霊を救う唯一の標なのです。